

永田數夫先生を悼む

経営学部長 石井彰次郎

1年のうち2月・8月は、商をする人にとり1番閑散な時期であるといわれている。ところがわれわれ大学に職を奉ずる者にとっては、2月は普段とは別の意味で極めて多忙である。在校生への出題・採点そして又入試・口頭試問・判定等々で追いまくられる日々が続く。

2月14日にわれわれ経営学部の入試判定会議が10時に開かれた。どうしたとか永田先生のお顔を見ることが出来なかった。2時頃、判定の事務作業が終了して会議室を出た時、正門の彼方から、にこやかに笑って手を挙げられた人がいた。「どうもおそくなりました。会議は2時からと思っておりましたので」と。これが私たちが元気な永田先生とお話した最後だった。

2部（夜間）の在校生の採点提出締切りが、1月末であるのに同先生からの提出はまだであった。そこで2月17日、直接先生からお受け取りするため御自宅の方に出向いたところ扉が閉じられたままであって、中からかすかに先生のお声が聞こえてくるという状況であった。これはただごとではないという判断の下、翌18日に直ちに緊急教授会が開かれ、九州の御家族の方にも御連絡をとると共に、数名の者が御自宅に直行することになった。先生のお宅は、神奈川県津久井郡津久井町にあり、相模湖・津久井湖畔の山頂に新築中で、当時その傍らのプレハブにお一人で住まわれておられた。4時半頃駒沢大学より出発し、現地に到着した時は既に真っ暗であり、雨がしとしとと降り出し山頂の靈気がきびしく膚に感じられた。寒さとも相まって緊迫した雰囲気にも包まれたのであった。扉をノックするとかすかに先生のお声が聞こえる。すぐさま、警察への連絡・御家族への電話・救急車の手配・御近所への連絡等の措置がとられた。漆黒の暗闇の中、静寂な住宅街の一隅に自動車のヘッド・ライトのみがにぶく

光っていた。窓から入る。内から扉が開かれる。タンカが運ばれ、直ちに麓の日赤病院に収容。翌19日九州から御家族の御上京。20日金曜日には1時小康状態と思われたのに、21日御死去との連絡がある。霊安室に眠る先生のお顔は実に穏かであった。22日午後地元の友林寺で御葬儀が行われ、ここに先生と永久にお別れすることになったのである。

先生は大正11年に佐賀県伊万里市にお生まれになり、旧制山口高商を御卒業の後、三菱長崎造船所に御就職、まもなく軍隊に入り、終戦後専門的な学問研究を志ざされ当時の東京商科大学（一ツ橋大学）に学ばれたのであった。その後久留米大学・大分大学・甲南大学・南日本短大に奉職し46年に駒沢大学に就任なされた。学問一途のお人柄で、その御著書・論文も数多く、また経営学会等多くの学会に属し、常に活潑な御発言をなされておられたとうけたまわっている。その該博な知識と旺盛な探究心は、先生に接した人々が一様に認めていたところであった。また常日頃学生を愛し、病院においても絶えず学生のことを気かけられ、よろしく頼むと何遍となく繰り返されたのであった。

享年53歳といえ、まだまだこれからであるとの感無きにしもあらずであるが、しかし学究としてのその一生は、おそらく悔いなきものであったのではなかろうか。ここに永田数夫先生の追悼号を刊行するに当たり、心から御冥福をお祈りする次第である。

昭和51年4月15日